

## 第 19 回（2015 年度）認定輸血検査技師試験の結果

平成 27 年 9 月 11 日

認定輸血検査技師制度

協議会 会長 岡崎 仁

審議会 会長 加藤栄史

試験委員長 加藤栄史

### 【1】 第 7 回 一次試験（研修終了確認試験）

1. 受験申請者数：236 名

実受験者数：231 名（欠席者 5 名）

2. 結果

1) 平均：77.3 点（最高 98 点、最低 37 点）

2) 合格者数：144 名（合格率 62.3%、144/231）

3. 内容と講評

認定輸血検査技師制度第 7 回一次試験（研修終了確認試験）は 6 月 21 日（日）、東邦大学を会場に行われた。試験時間は 1 時間で、内容は輸血検査の基礎、不規則抗体同定、計算問題などとした。昨年より問題数を多く出題したが、基本的な問題であり、殆どの受験者が最後の計算問題まで回答していた。平均点も 77.3 点と、一次試験としては妥当な難易度といえる。その中で、「血液型判定」、「緊急時の赤血球製剤（血液型）選択」、「抗原表から存在する可能性の高い不規則抗体の推定」の不正解者は、総合で及第点であっても不合格とした。結果、合格率は 62.3%で、昨年（57.3%）に比してやや上昇した。

### 【2】 第 19 回 二次試験（認定試験）結果

1. 受験者数

・ 申請者 279 名中、欠席者 6 名で、実受験者は 273 名であった。

・ 実受験者 273 名中、二次新規受験者は 142 名（52.0%）、再受験者は 131 名（48.0%）であった。

2. 試験結果

1) 成績

筆記試験

平均点：61.8（62.2）、最高点：87.3（84.8）、最低点：45.1（42.9）

実技試験

平均点：52.6（53.2）、最高点：94.0（96.6）、最低点：0（2.3）

（ ）は 2014 年の成績

筆記、実技とも 100 点満点、

実技の血液型：抗体：カラムの配点比率は 3：2：1

## 2) 総合判定

- ・実受験者 273 名中、合格者は 70 名（合格率 25.6%）であった。
- ・受験科目別受験者数（合格者数、合格率%）は以下のごとくであった。  
筆記のみ：30 名（16 名、53.3%）  
実技のみ：37 名（19 名、51.4%）  
筆記・実技：206 名（35 名、17.0%）

## 3. 試験概要と成績について

### 1) 概要

認定輸血検査技師制度第 19 回二次試験は 8 月 22 日、23 日、名古屋市立大学を会場に行われた。申請者 279 名中、6 名が欠席したため、実受験者は 273 名であった。これは昨年の 253 名に比し、20 名の増加であった。「筆記+実技」の中では新規受験者が 141 名、再受験者が 65 名であった。

全体の合格率は 25.6% (70/273) で、昨年の 20.2% (51/253) より 5.4%増加した。単一科目受験者の合格率は筆記 (53.3%)、実技 (51.4%) にあったのに対し、「筆記+実技」の合格率は 17.0%と不良であった。

### 2) 筆記試験の評価

平均点は 61.8 点で、昨年の平均点 (62.2 点) とほぼ同じであった。合格基準点以上の得点者は 80 名 (33.9%) で、昨年 (35.3%) に比し、やや低下した。マークシート問題、記述 A (輸血学の基礎)、記述 B (正誤問題) の正答率は平均で 6 割以上であったが、記述 C (臨床問題)、計算問題は 38.7%、23.9%であった。臨床問題と計算問題は昨年と同様に低い正答率であった。問題数が多いことに起因するかは不明であるが、日常の診療で遭遇する問題であることから、日常業務の中で考察する訓練を行う必要がある。

### 3) 実技試験の評価

全体の平均点は 52.6 点で、昨年 (53.2) と同レベルであった。合格基準点以上の得点者は 80 名 (32.9%) であり、昨年 (29.8%) に比し、やや増加した。但し、実技のみの合格率が 51.4%であったのに対し、両科目の受験者では 29.6%と良くなかった。

血液型検査の試験では及第点に達した受験者は 19.3%であり、他の試験に比して低率であった。具体的には RhD 陰性検体について減点が昨年より増加した。さらに、問題を熟読していない事による不正確な文言の記載や記載もれが目立った。また、オモテ・ウラ不一致の原因の推測と必要な追加検査の選択ができていない受験生が多く認められた。これは日常業務で必要な事項であり、更なる研修が必要と考えられた。再検査が必要な検体において、スライド法を実施せず減点となった受験生も散見された。受験生の思い込みで、正常検体においても異常反応 (mf など) と回答する受験生も認められた。その為、0 点 (マイナス点も含む) の受験者が 67 名 (25.6%) であった。

赤血球抗体検査の問題では抗原表を正しく読み解く力が求められ、“可能性の高い抗体”と“否定できない抗体”を過不足なく記すことが合格の必要条件である。今回は解離法がグリシン/酸解離法に変更になったことが周知された事、一次試験で、抗体同定のできない受験者がふるい落とされている事などから、及第点を取得した受験者が 76.5%と好成績であった。

カラム凝集法の問題は2検体を使用して交差適合試験を実施した。さらに、机上問題として基礎的な問題を2問、症例問題を4問出題した。多くの受験者は検査手技が正しく実施されていた。ただし、問題を熟読していないためか不正確な文言の記載や記載もれによる減点が認められた。

#### 4) 評価について

筆記試験は加点方式で、実技試験の各科目の得点は満点からの減点方式による。各科目の得点の合計点が基準点以上を合格とした。ただし、1科目でも0点であった受験者は不合格とした。評価ランクに関しては、一定の基準にてA~Fに分け、絶対的評価とした。各科目、合計ともに各々100点満点として、基準点以上の合格をA~C、不合格をD~Fに分けた。

今回、実技試験において、血液型・抗体・カラムの全てにおいて及第点を取得した受験者は17.7%と残念な結果であった。また、合計点で合格点であって血液型検査試験が不合格点であった受験者が32名と多くに認められた。血液型検査の試験で、0点の受験者が多数、認められF評価とした。さらに、およそ30点未満(100点満点で)の受験者も、技術に関する多くの知識を修得する必要があると考え、F評価とした。

#### 4. まとめ

筆記試験はほぼ例年と同じ成績であり、実技試験は血液型を除き、良好であった。従って、最終合格率は25.6%と、最近の5年間で高い方であった。特に、今回は筆記のみ、実技のみの受験者の合格率が50%を超えていた。このことから、系統的に正確な知識、手技に十分な時間を掛けて修得することで合格する事が可能である。